
異界を渡る旅人 本編補足物語

書との契約者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異界を渡る旅人 本編補足物語

【Nコード】

N4657I

【作者名】

書との契約者

【あらすじ】

本編で語られていない。もしくはぬけている部分を補足するための短編集です。この短編集も本編である【異界を渡る旅人】と同時に並行で更新する予定なんだけれども……

現在、『ムヒヨとロージーの魔法法律相談事務所編』。【空白期】について主に描かれています。

この小説は小説サイト『Arcadia』様チラシの裏「異界を渡る旅人」内で公開している物と、同一作品です

こちらの作品は本編である異界を渡る旅人の方に 移動しています・

こちらを更新する予定は無くなりました。 本編のほうでお楽しみ下さい

<http://ncode.syosetu.com/n2755h/>

【空白期】 第一話 杖探し 前篇 (ムヒヨとロージの魔法律相談事務所)

短いですが【学生編】と【青年編】の間の空白期の第一話前篇です。
この話では、青年編に出てくる重要な武器である『杖』についてのお話です。

本編と同時進行で、こちらの方も書いてゆくつもりです。

何かおかしな点などありましたら、感想の方までお願いします。

少し加筆しました。

「やあ。カズキ君にレフィア君。待ったかな？」

MLSの門の前で待ち人を待っているところから声がかかる。

そちらを向くと、マントを肩にかけて松葉杖をついたページ先生がいた。

「いえいえ私たちも少し前に来たところなので…」

そう同じくマントをひっかけているレフィアが答える。

今の恰好は以前見たどこかの民族衣装の様なものではなく、きちんとした魔法法律家の恰好をしており、問題なく街にとけ込んでいる。

今のレフィアの身長は、160センチくらい。今の俺の身長と比べると、姉と弟という感じの身長差である。

本当だったらもう20代後半なのにな…やっぱり精神年齢が落ちていような気がする。

それにしても何でレフィアがここにいいのか…

それは…まあ簡単に言うと、レフィアが自分もほしいと言いついたのがきっかけであった。

まあ、書の管理人格であるから、もしかしたら俺と同じであるかもしれないし、杖の一本くらいあってもいいかもしれないのだが…

まあいいか。必要ならば今揃えても後でそろえてもおんなじことだろうしな。

そんなことを考えながら、街を歩いてゆく。
曲がりくねった路地を入りさらに奥へ。奥へと進んでいく。

そして止まったのは、路地の行き止まりにある看板もかかっていないお店。

そこへペイジ先生は入っていく。

カランカラン。

薄暗い店内に光がさす。

店内の空気はあまりこの店に入る人が少ないためなのか、埃臭い。

店に入ったところから、すぐに見えるのは、壁を覆いつくす棚、棚、棚。

そしてその中には、多くの箱が収められている。

また、同じような箱が棚からはみ出して床からも積み上がっている。
はつきり言くと、店全体が箱で覆われている。

「コホ…コホ…埃っぽいわね。」

隣にいるレフィアの咳が聞こえる。全くもってその通りだな。

ここに長くいたら、落ち着いていたはずのアレルギー性鼻炎が再発しそうだな。

すでに鼻がムズムズし始めている。

「ハ…ハ…ハクシヨン！」

あゝあ。帰ったらきちんと薬を飲んでおかないとな…ティツシュどこだったかな？

「おゝい…いないのか」

ページ先生が、奥に続く扉へと行くために積み上げられた箱の間をすり抜けるように歩く。

その瞬間。

ページ先生の肩が、積み上げられていた箱にあたってぐらりと揺れてくる。

そしてその箱は、ティッシュを漁っていた俺に向かってきたらしいらしいというのは、俺には、何かの影が落ちてきたということしかわからなかったからだ。

「あ…」

そんな声が聞こえただろうか？

俺に向かってバランスを失った箱は雪崩のように押し寄せたらしく、目から花火が散り俺の意識は一瞬のうちに落ちていった。

事の始まりは、少し前に、ページ先生の目の前で使えるかどうかわからない、召喚を試したことであった。

そのことから、今回は、杖を準備するということになっていた。

本当ならば、その次の日曜日に杖を準備するはずだったのに、その日は、何の因果かM.L.Sの敷地内にに大量の怨霊や、悪霊が入り込んだことによって中止。

ページ先生は、侵入した霊の執行へと狩り出されてしまって俺は、手持ち部沙汰になってしまった。

その後すぐに、寮の方にも悪霊がやってきたためにムヒヨ、ヨイチ、ビコにエンチューと一緒に避難をしていたが、その途中で霊に襲撃されてしまった。残念ながらその時の俺には何とかする手段はなかった。

書の術式を放つにしても何らかの媒介物が必要である。媒介物なしでも放つことは可能ではあるらしいが、少なくとも俺には無理だ。そのため、俺は役に立たなかった。本当ならその日にレフィアのもと一緒に杖を買いに行くはずだったのに…

実戦が出来る教員や上級生はみんな侵入した霊の方へ向っていて周りには誰もいない。

目の前の霊はおおよそだが2メートルほどありまだまだ成長期にも入っていない俺たちから見れば、見上げるほどの巨体である。

その霊は、もうすでに俺たちを視界に収めていて、すでに何かを放つ直前であつたらしい。

やられる！と思った瞬間であつた。

とっさに書きつけたであろうムヒヨの『魔縛りの術』が発動した。

いやはやあれには本当に驚いた。

なにせ、ムヒヨにはいくら才能があるっていうことを知っていたとはいっても、あくまで知識としてであつて、本当に才能があるというのはいつもの授業の様子を知っている俺としては、にわか信じられなかったからだ。

なにはともあれムヒヨの才能はこの時に開花したのである。

…それと同時にエンチューの焦りも一段と増している気がするの
は…気のせいだろうか？

ここは…どこだ？

真っ白な世界。風の動きは全く感じないがどんどん落ちていく感
がある。

周りを見渡すと何かが浮かんでいる。そしてどんどんその何かが
大きくなっていく。

あれは…杖？

さまざまな大きさ、形の杖がそこには浮かんでいる。

そして、俺はそこへとゆっくりと突っ込んでゆく。

周りには様々な種類と大きさの杖が浮かんでいる。

ページ先生が持っているような松葉杖、宗教の学習を行ったとき
に出てきた権杖、司教杖、パストラルスタッフ。どこかの漫画に出
てきそうな、いかにも魔法使いの杖。などなど長いものや短いもの
が浮かんでいる。

そんな中を俺はゆっくりと降りてゆく。

だんだんと終点が近づいてきたのか降りていく速度が落ちていき、
やがて一本の杖の前でとまる。

その杖は、一メートル位の大きさの真っ直ぐとした杖である。

その杖には、何かを感じる。そう思って、それに触れた瞬間であった。

弾き飛ばされるようにして真っ白な世界が消滅した。

後に残ったのは、真っ暗な空間。

「……!……」

何かが聞こえたような気がした。

その何かを認識することなく俺の意識は、そこで完全に途絶えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4657i/>

異界を渡る旅人 本編補足物語

2010年10月11日13時08分発行